

館蔵資料紹介 No.15 (紫式部・和泉式部・小式部「三代」の物語)

奈良絵本『小しきぶ』—電子化に寄せて—

弓 削 繁

室町時代から江戸時代初期にかけて陸續と生み出されてきた短編の物語群がある。その数およそ四百種。室町時代物語、中世小説などと呼ばれる広義のお伽草子であるが(御伽草子という名称は、享保期頃、大坂心齋橋筋の書肆柏原屋洪川清右衛門が『文正草子』をはじめとする二十三編を「御伽文庫」と銘打って刊行したのに由来する)、ここに紹介する『小しきぶ』はその傑作の一つであり、資料的にも誇るべき一本といってよいであろう。

見返しに昭和28年の受入れ印があり、末尾に「藤」(藤園堂)、「月明荘」(反町弘文荘)の朱印があるので、



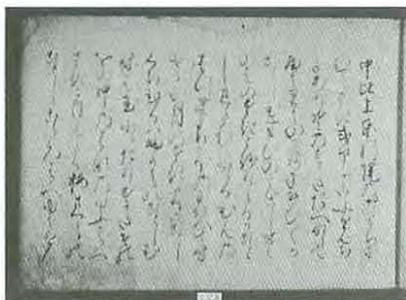
これら古書肆の手を経てきたことが知られるわけであるが、かかる資料に目をとめたわが先人の慧眼にまず敬意を表したい。

お伽草子は多く絵巻、奈良絵本、絵入り版本の形をとるが、本書は各巻8葉、鳥の子紙に原色の泥絵具と胡粉を塗沫して描いた「奈良絵」を有する二巻仕立ての奈良絵本である。お伽草子の話柄は作者・享受者の位相とも関わって多種多様であり、さまざまな分類が行われているが、いま公家もの、武家もの、僧侶もの、庶民もの、異郷もの、異類ものという六分類説に従えば、『小式部』は公家ものに属し、中でも歌人伝説物もしくは歌徳物に数えられる。

本文は幸いなことにこのたび電子的図書館サービスの一環として、インターネット上に公開されて容易に見ることが出来るようになったので、皆さんには是非一度アクセスして頂きたいものであるが、ここで改めて物語の内容を紹介して原典への誘いとしたい(括弧内に説話及び説話の話型を摘記する)。

中頃中宮彰子のもとに紫式部という才色兼備の女房があった。ある夜不思議な夢をみて懐妊、美しい女兒を生んだ(夢想懐妊)。その子は幼い時から和歌に秀でていた。母の式部はやがて石山寺に籠もって『源氏物語』六十巻をものするが(『源氏』は五

十四帖。当時六十巻説があった)、その間娘は継母の手に委ねられた(継子苛め)。十三の春には鬼神に魅入られて瀕死の



重病に罹るが、詠歌が鬼神を感動させて事なきを得た(鬼神感応)。こうして、この娘も彰子の眼にとまり、和泉式部としてお仕えした。その頃、都には夜毎酒呑童子という鬼が出て人の命を奪った。勅命をうけた頼光・保昌は住吉明神の加護もあって見事に鬼を退治、保昌はその勲功に和泉式部と結ばれた(酒呑童子説話)。式部は歌の名人道命法師と浮名を流すが(道命説話)、母の式部は『伊勢物語』の業平の故事等を引いて論じた(女庭訓)。[上巻]

また赤染衛門は悲傷した和泉式部を歌で訪った。式部は巫女に伴われて出雲社に参り、神前で霓裳羽衣の舞を舞い、保昌との関係を修復することができた(夫婦和合)。十七の春、女兒を生むが、宮仕えの身を憚り、東寺の門前に捨て子する(捨て子譚)。女兒は清水寺に子授け祈願にやってきた河内国の老夫婦に拾われ、大切に養育される(申し子譚)。和歌に秀でた孝行娘に育った。一方時は流れて、行く末に不安を抱く歳になった式部は我が子を探す旅に出る。そして、長谷寺で祈願した式部は、河内の山奥に迷い入るものの、偶然にも一夜の宿を請うた草庵で娘との再会を果たす(霊験譚)。こうして都に上った娘は、住吉行幸の場で見事な歌を披露して人々を感嘆させ(大江山説話)、小式部の内侍として召されることになる。帝が愛した小松が枯れたのを蘇らせたのも他ならぬ彼女の名歌であった。このように、歌の道は嗜むべきであるという。[下巻]

以上、この物語は紫式部・和泉式部・小式部という王朝時代の三才媛を親・子・孫の三代の系譜に位置づける興味深い草子であるが、ここには和歌が種々の難局を切り開いて幸せをもたらすという、所謂「歌徳」を軸に、当時人口に膾炙した様々な説話が綴り合わされていく構想が見て取れる。説話性や啓蒙性は、当時の享受者の知的興味に応えるものとしてお伽草子の主要な属性になっているが、それらが林屋辰三郎氏のいう「町衆」のアイデンティティ形成に一役買ったことを見逃してはなるまい。岡見正雄氏の説く「室町ごろ」を肌で感じ取りたいものである。

紙面の制約があつてここでは具体的な指摘は割愛せざるを得ないが、例えば娘の和泉式部に女房の心得を諭す紫式部のことばには、人付き合いのための身の処し方が細々と語られていて、ここからは当時の女性の状況が透視される。また近年学界の注目を集めている中世の学問・注釈の世界や、民俗・芸能伝承への回路を有する記事なども見出される。このように、『小式部』は様々な時代相を内包する点で、典型的なお伽草子と評して誤らないであろう。



ところで問題は本書の資料的価値であるが、『小式部』の伝本は、他に次の四本が知られている。

- (1)天理図書館蔵本(藤井乙男氏旧蔵。挿絵なし。一冊写本。『室町時代物語大成 五』所収)
- (2)小野幸氏蔵本(前田善子氏旧蔵。奈良絵本。但し挿絵を欠く。上下二冊。『大成 補遺一』所収)
- (3)戸川濱男氏旧蔵本(巻子本。挿絵なし。内題に『いつみしきふの物かたり』とあるが、『小式部』の下巻と一致し、同作品と認定される。『和泉式部全集 本文編』『大成 二』所収)
- (4)赤木文庫旧蔵本(奈良絵本。下巻欠)

なお、東洋大学に同名の奈良絵本があるが(岩波文庫『続お伽草子』『和泉式部全集 本文編』所収)、これは内容を異にする別本である。

そこで、本書を含めたこれら五本を校合してみると、まず天理本とその他の諸本とに大別され、後者は更に戸川本・赤木本・本書のグループと小野本とに分かれる。このうち小野本にはやや後出性が指摘されるので、問題は天理本と本書のグループ(奈良絵本系統本ということも出来る)との関係に絞られてくるが、両者はお互いに誤脱等の欠点を含んで相補う部分があるところから、並列の関係と判断される。

かくして、本書は上下巻揃いの完本として、下巻のみの戸川本・赤木本の欠を補うとともに、本文的にも小野本に勝るところがあり(小野本は挿絵も欠いている)、奈良絵本系統の最善本ということになるのである。

(ゆげ しげる：教育学部教授)

(配置場所：特別資料・フィルム庫)

(電子本文：<http://www.gifu-u.ac.jp/~gulib/index.html>)